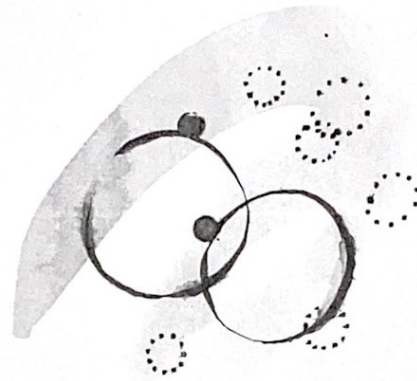


# 母塾

2019・6・29

VOI・22

新小岩幼稚園・未就園児クラス



illustrated by Kurumi

## 『 おっばいバイバイ 』

アドバイザー 猪之鼻晴子

カーテンの裏に隠れて「ママ恥ずかしいからこっちに来て。」と飲んでいたおっばい。この6月ですっかり飲まなくなった。実に4年半。23才の長男の時は私の知識がなく母乳が止まってしまった。長女・次女・次男・三男がそれぞれ3才まで飲み、6番目の4才まで合計16年以上にわたり母乳をあげていたことになる。どの子も結局、子どもが飲みたいと言っているうちは飲ませた。子どもたちは必ず3才近くになるとおっばいに別れを告げた。「ずっと飲んでもいいよ。」と言っても、どの子も「もう、いらない。」と言う日が来た。13才になった三男は最後に「ママ、おっばい一滴も出ないよ。からっぽだよ。」と言ってその日に飲むのをやめた。久しぶりに生まれた6番目の子には「ずーっとずーっと飲んでもいいからね。と言って今まで来たけれど、やっぱり終わりは来た。おっばいにさよならをして泣いたのは子どもではなく、私だった。ありがとう。今まで、こんなお姉ちゃんお兄ちゃんたちのお下がりのおっばいを飲んでくれて。生後1か月健診で体重がまったく増えていなくて、助産師さんに叱られた。やっぱり、6回目の使い古しのおっばいじゃ無理か。とあきらめそうになったが、赤ちゃんは必死にしがみついて飲み育ててくれた。上の5人の子は「よくそんなに飲むね。」と呆れていた。自分たちが飲んだことなどすっかり忘れているのだ。あんなに泣いて欲しがったくせに。

おっばいをやめた途端に、4才は私以外とも眠れるようになった。ゲンキンなものだ。今日はお姉ちゃん、明日はお兄ちゃんと一緒に寝る人を選んでいる。「ねえ、まだ飲んでもいいよ。」と抱き寄せてみた。「もういらない。のみかたわすれたもん。」

子どもは自分の成長に必要なものは容赦なく欲しがり、必要がなくなると振り返らない。きとおっばいより大切なものを見つけたのだろう、オムツやシャンプーハットや自転車の補助輪やしつけ箸や補助便座はまるで自分が使ったことなどなかったように忘れてしまう。きとおっばいもどんな味だったのか、どうやって飲んだのかも忘れてしまうだろう。いろいろ要らなくなっていくこと。それが成長するということだ。

今日はお姉ちゃんと二段ベッドの上で寝るらしい。クスクス笑って話している。久しぶりに隣の寝返りを気にしないで済む。ゆっくり眠ろう。少し自分だけ置いてきぼりの気持ちだけれど。

harukoinohana1717@gmail.com